



## A1-0 設備力について

建築主が素人であるばあいは計画内容の説明は難しくていい。腕の広さまで呑みこんで貰う必要あり。

詳細程度のもを「どうでもこうでも粗雑で」と皮肉られて困惑するような例はよくある。

設計図の十分な理解を素人に要求するのは無理な面もあるが、でき上りを見て「こんな筈ではなかった」は悪手ものである。ただし設備方に自信があるばあいは、あるいは建築家のプロフェッショナルとしての權威を認めて貰っているばあいは別は別であり、実はそうありたいと願うものである。以下、これらに関する二、三の事例を述べる。

(1) 機械の発熱量が大きいので、当然的冷却設備が必要であったが、業主から「換気だけでよい」といわれた。そこで冷却計画をやめてみたがどうしてもプロフェッショナルの良心が許さないので、冷却計画の必要性を強調し結局施工費を返ささせた。冷却なしでは夏季には40℃以上になることは明らかであった。施工主から何といわれようと実務技術的に必要なものはよく説明して設置するか、少なくとも設置できる計画にしておくのがプロフェッショナルの責務である。

(2) 金の都合でペアガラスをシングルにしたために熱損失が大きくなって空調がうまくやらず困った。

(3) 工場のスレート屋根の裏の断熱紙を、金の都合で取止めたために夏季クレーンのオペレーターが暑くて早退した。「こんなに暑くなるのであったら断熱紙を止めるのではなかった」との施工主のいひ分であった。耐火層の暖房がトラブルの温床となる。

(4) 土質調査

敷地内排水をやらなかつたために、大雨のときに水がアッときて土質が崩壊した。金が足りなくて敷地内排水工事を削ったためである。

